

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第194号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成30年12月21日

タンチョウ



2018. 4.17 江別市野幌森林公園

撮影者 田 中 冬 彦 (江別市)



も く じ

タンチョウ 道東から全道へ、さらにアジアのシンボルに	
NPO法人タンチョウ保護研究グループ理事長 百瀬 邦和	2
表紙の鳥 (タンチョウ) 江別市 田中 冬彦	4
タンチョウへの給餌量削減 - 3年間で明らかになったこと、そしてこれから - (公財) 日本野鳥の会	
鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ 原田 修	5
古文書から探るタンチョウの歴史 - 石狩低地帯に帰ってきたタンチョウ - 北海道大学大学院文学研究科 久井 貴世	6
鳥の卵の不思議について	
NPO法人バードリサーチ 黒沢 令子	9
野鳥情報コーナー	
珍鳥コンビ! 天塩町更岸にてマナヅル・クロヅル発見!	
オホーツク管内滝上町 小林 和史	
札幌市中央区 的場 香奈	11
野幌森林公園瑞穂の池にアカガシラサギが長期滞在	
江別市 富川 徹	12
探鳥会ほうこく	13
探鳥会あんない	17
鳥民だより	18

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<http://aigokai.org>)で閲覧することができます。

タンチョウ 道東から全道へ、 さらにアジアのシンボルに

NPO法人タンチョウ保護研究グループ理事長 百瀬 邦和

北海道のタンチョウの歴史についてはこれまでに先輩たちによって沢山記載されていますので、今回は私がタンチョウに関わるようになった1980年代以降の状況について報告することにしたいと思います。

北海道における分布拡大の歴史

<繁殖地>

1982年に4人乗りセスナ機を使って飛行調査を行ったのが道東の繁殖地全域を対象とした初めての繁殖分布調査で、これがチームとしてタンチョウの基礎調査を行うタンチョウ保護研究グループ(現在の名称は2007年から)の活動の始まりでもあります。同年の飛行調査は十勝の大樹町から根室北部の野付崎までを2日間、8時間かけて行い、30地点で巣を確認しています。この時点では濤沸湖(1982年)と国後島(1981年)でも繁殖確認の報告があることから、道東の広い範囲がすでにタンチョウの繁殖域となっていたと言えるでしょう。その後、道東地方では沿岸の湿地帯から河川上流部へ営巣地が広がり、現在は十勝川上流の大雪山系山麓の新得町、阿寒山系山麓の足寄町にまで及ん

でいます。また釧路地方では今年ついに釧路川源流の屈斜路湖畔まで達しました。根室地方では河川上流部への広がりとともに北方四島で繁殖つがい数が増加しているようで、2017年には5つの島で9つがいが確認されたとの連絡が入りました。オホーツク地方沿岸では1999年から毎年繁殖確認があり、最後に飛行調査を行った2015年には少なくとも6つがいの営巣が確認されています。道北地方では2004年に初めてサロベツ湿原で1つがいの繁殖が確認され、以後繁殖地が広がって2015年には日本海側とオホーツク海側を合わせて6つがいの営巣が確認されました。その後の情報によれば、沿岸に沿ってオホーツク地方と道北地方の繁殖地とが繋がる方向にあるようです。

2012年にタンチョウの繁殖地が初めて日高山脈を超えました。このつがいは勇払地方南部と日高地方沿岸部を行動圏としていて、他の地方のタンチョウのように道東との行き来はありません。このつがいはその後も繁殖を継続しており、その子供達だと思われる複数の若いタンチョウが道央各地で見られるようになってきました。未だ営巣の確認はありませんが、今年は石狩川流域でも目撃情報が増えて

きたので、近い将来、道央地方がタンチョウの安定した繁殖地となる可能性が見えてきました。



図1 1982年以降に繁殖が記録された地点
(一つのドットに複数の営巣地が含まれている所もあります)

＜越冬地＞

タンチョウ保護研究グループの総数カウント調査は繁殖分布調査から3年遅れて1985年2月に始め、以後1月下旬～2月上旬に毎年続けています。私たちが北海道の一斉調査（環境省の委託事業）とは別にこの調査を始めた理由は、1952年から行っている従来の調査方法による結果が実数を反映しなくなってきたと考えたためです。この年のカウント結果は344羽で、道の調査では327羽（一部飼育個体を含む）でした。また、同年の分布は阿寒1カ所と鶴居2カ所の給餌場以外では、釧路地方の音別町と標茶町に各1カ所ずつでした。その後33年が経過し、タンチョウの総数、そして越冬分布も劇的に増加しました。総数は2016年1～2月の調査で1,850羽を記録し、分布は十勝地方の広尾町から根室地方のはほぼ全域、年によってはオホーツク地方の濤沸湖や北方四島でも越冬が確認されています。日高山脈の西側に進出した1つがいは冬も日高地方に残っています。つまり道北を除く繁殖地周辺で越冬するつがいが増えてき

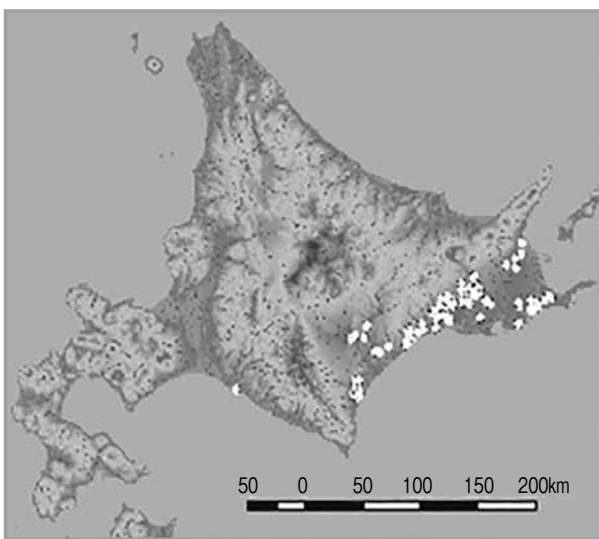


図2 2014年度に越冬が確認された場所(白いドット)

たといえます。1985年には左記3カ所の給餌場（3大給餌場）だけで生息数の97%を占めていたのが2018年には43%に減少しました。特にこの数年は道東地方でも飼料用トウモロコシの作付けが増え、それが秋の嵐によって倒伏して収穫できない畑が現れたり、暖冬の影響で冬にも餌が採れる畑が現れることによって給餌場への集中が減ってくるようになりました。2015年度から始まった3大給餌場での給餌量削減が影響している面もあるかもしれません。

給餌量削減と今後の動き

時に300羽を超えるタンチョウが集中する給餌場から周辺に向けて分散が進んでいることは歓迎されるべき現象でしょう。まず、鳥インフルエンザなど感染症の発生で大量死が起きる危険が軽減されることになります。さらに絶滅を回避するための緊急避難処置としての「給餌」が続けられたことによって、地域個体群のほぼ全数がそれに頼ることになった「異常事態」から、「正常化」つまり野生動物としての本来の姿にもどる方向につながるかもしれないからです。環境省が2015年度から行っている給餌量削減はそれらを狙った試みです。しかし、一方では歓迎できない、悩ましい面があることも事実です。一つにはタンチョウの越冬地が広く薄くなったことによって総数の把握が難しくなってきたことです。北海道という限られた範囲でこれまでと同じようにタンチョウが将来も増え続けていくということはありえないことです。希少な種を保護する際に各種の施策を行うには、個体数が増加しているのか、減少しているのかを見極めることは最も重要な資料なのですが。もう一つの問題は、給餌場から分散したタンチョウの行き先です。現状は給餌場以外での冬の記録はほとんど酪農場やその周辺だということです。採餌場所が給餌場から牧場に移っただけであれば正常化とは言えませんし、何より酪農家とのトラブルが増えるばかりです。「悩ましい」というのは正にこの点です。給餌量を段階的に削減し、同時に牧場への依存を減らす方策を考案してタンチョウの生態の正常化を図りたい、それでは給餌や牧場に代わる自然の餌は確保できるのか、生息数が減少してしまうのではないのか、そもそも北海道のタンチョウの適正な生息数はどれくらいか…。

絶滅に瀕した生物に対する保護の取り組みは病気を患った人とその治療に例えられるかもしれません。北海道のタンチョウの場合には、危篤状態で入院し、給餌という特効薬が有効に働いて病状は劇的に回復しました。もちろん特効薬以外の病院あげての治療態勢もありました。具体的には生息地への立ち入り制限、禁猟の徹底、天敵の駆除、自然餌の確保など地元の人たちや各種団体、行政など種々の対応があった上でのことです。さらにその背景には道民あげての世論の応援があったこともマスコミの報道などから窺えます。現在はまだ特効薬を投与し続けなければならない、つまり入院している状態ですし、特効薬の副作用も出ています。治療を受けながらも退院を迎え、通院の頻度を

減らして、できれば定期検査のための通院程度の状態に持っていければ良いのですが、ハードルはまだまだ沢山ありそうです。



写真1 冬の河川で索餌するタンチョウ
— 水域の餌条件が今後の大きなテーマです

北海道の冬の収容能力を超えたタンチョウが本州に渡って越冬するようになるのが理想的な一つの形なのでしょう。まずは道内での分布が広がって、その先に津軽海峡越えを目指す、というのが順当でしょうから、道央の低地帯に進出し始めている若いタンチョウの今後の頑張りに期待したいものです。その際に最も懸念される障害が農業との摩擦、そして市民からの的外れな注目、つまり意図的ではないにしろ結果としての追回し、などです。今年、タンチョウが最も身近であるとされている鶴居村では、村長を会長とする「鶴居村タンチョウと共生するむらづくり推進会議」を発足させました。この会議は鶴居村におけるタンチョウとの共生のあり方の将来像を検討するためのものです。さらに、分散してくるタンチョウを迎える側の道央地方では、むかわ町に市民団体の「タンチョウ見守り隊」、長沼町では官民共同で「タンチョウも住めるまちづくり検討協議会」が活動を始めています。このように道内各地でタンチョウを旗印として、野生動物＝自然と共生する社会

を目指す動きが広がるのがタンチョウの住める北海道に結びつくことになるでしょう。

大陸との関係

ここでは生物学的な関係としてではなく、社会的な側面からのタンチョウ保護について考えてみましょう。北海道のタンチョウが絶滅の瀬戸際から復活したことは野鳥保護関係者の間ではよく知られています。この復活に大きく寄与したのは冬の給餌でしたし、現在もタンチョウの冬の餌の多くを給餌が支えています。雪の給餌場に集まるタンチョウを目当てに大勢の観光客が訪れていますが、彼らに「給餌場」はどのように見えているのでしょうか。数年前、釧路に転勤してきたある方に、給餌場はタンチョウを観光客に見せるための施設だと思った、という感想を聞かされました。思いがけない率直な感想にびっくりしたことを覚えています。しかし改めて現状を見直すと、初めてタンチョウを見る多くの人にとってそれは自然な感覚なのかもしれません。最近では外国からも多くの観光客が雪の中のタンチョウを見に訪れますし、韓国や中国からはツルを目玉とした地域興しのための視察を目的に給餌場や関連施設を訪れるグループも増えてきました。つまり、私たちのタンチョウとの向き合い方が、保護と地域発展の先例として輸出されているかもしれないのです。韓国の非武装地帯に接するCCZ（文民統制区域）でねぐら近くの河原に給餌と組み合わせたハイドを作って、結果ツルにねぐらを放棄させてしまったという例、中国の越冬地である自然保護区内の広大なアシ原の一角に給餌場を設けて観光客がツルを見易くしていたなどという例も現われています。北海道では弊害の見てきた特効薬の、見た目の効果だけを安易に持ち帰ってはほしくないと思うのですが…。

タンチョウが野生の鳥として人と共に暮らしている社会を目指している、という私たちの姿勢を北海道から世界に発信していきたいものです。

表紙の鳥

タンチョウ

2018年4月17日10時過ぎ野幌森林公園の北部を歩いている時、上空に大きな鳥の影がありました。白くて驚きましたが、すぐにタンチョウと気づきました。旋回し、何度か鳴きながら高度を上げ、北の方向へ消えていきました。画像を拡大してみたところ、右脚基部に黄色い足輪をしているようですが、文字は読み取れません。

その後、タンチョウ保護研究グループの百瀬邦和氏に問い合わせ、「足輪を付けていたことと昨年生まれ若鳥であることなどから、2017年7月に胆振管内むかわ町周辺で標識した318番（足環番号）個体であると思われます」と返答をいただきました。さらに、朝日新聞記事（2018.10.29）によると、この個体は今年3月上旬に親と別れた後は単独行動し、3月下旬～4月に札幌市、江



別市、胆振管内白老町、8～9月には空知管内の長沼町、浦臼町でも飛来が確認されているそうです。

最近、タンチョウは道東から道内各地に分散しているようなので、いろいろなところで観察する機会があるかもしれませんね。
田中 冬彦（江別市）

タンチョウへの給餌量削減

ー3年間で明らかになったこと、そしてこれからー

(公財) 日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ 原 田 修

タンチョウの個体数回復の大きな要因となった給餌ですが、一方で給餌による人馴れから、農業被害や市街地での電線衝突、自動車事故、そして給餌場の過密化による伝染病蔓延のリスク等の問題が顕著になっています。問題解決に向け、環境省は2013年に「タンチョウ生息地分散行動計



写真1 給餌場で採餌するタンチョウ

画」を策定し、具体的な取組みとして給餌量削減に踏み出しました。これは環境省委託の3大給餌場（阿寒、鶴見台、サンクチュアリ）への餌の支給量を、2014年度を基に2015年度より年1割ずつ削減し、2019年度に半減させる、というものです。

削減1年目の2015年度は、積雪量の少ない冬でした。台風の影響で収穫前に倒れ、コンバインで刈取れなかった飼料用デントコーンが給餌場周辺の畑に大量に残っていました。タンチョウは畑に集まり、給餌場への飛来が大幅に減少したため、給餌量削減の影響は全く分かりませんでした。

● 給餌量2割削減でタンチョウの行動に変化

削減2年目となる2016年度は、前年度とは変わり雪の量は平年並みでした。これまで一日を通しサンクチュアリを利用していたタンチョウが、午前中に餌を全て食べ尽くし、午後にはほとんどいなくなりました。そこで、これまで午前1回だった給餌を2回に分け、午後にも給餌を行いました。この他、例年は1月に入ると、餌を撒いた後すぐには食べないタンチョウが、その冬は1月以降も給餌直後から先を争って食べていました。

村内もう1つの大給餌場である鶴見台でも、前年までと比べ午前中の飛来数が減り午後の給餌時間帯に集中するようになりました。さらに関係者の聞き取りから、これまで

ほとんどタンチョウを見なかった農場でも、頻繁に見られるようになった例が報告されました。以上の変化はこれまでと明らかに異なるため、削減の影響が表れてきたと考えています。

● 積雪量に左右される飛来数

図1をご覧ください。削減3年目の2017年度（実線）は、積雪がなかった11月、年末と3月8日の季節外れの大雨で雪解けが一気に進んだ3月に、飛来数が大きく減少しました。それ以外の時期でも、積雪が平年並みだった2016年度（点線）に比べ、飛来数が少なかったことが分かります。雪が少ないほど、秋耕こしをしていない畑でデントコーンの落穂が食べやすくなり、給餌場への依存度が低くなったためと考えられます。

この結果、2016年度の冬に指摘されていた、農場への飛来数や滞在時間の増加は見られませんでした。これは前述したように、周囲の畑で餌が食べやすかったためであり、削減3年目については、影響は良く分からなかった、判断できなかったと言えるでしょう。

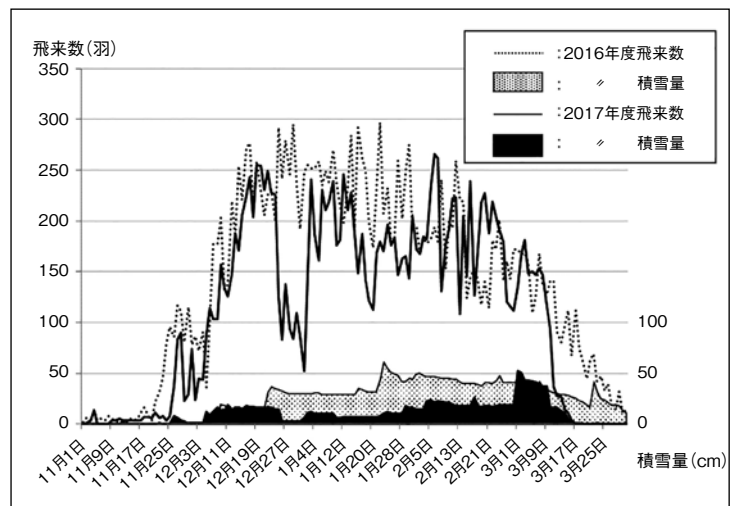


図1 サンクチュアリ給餌場のタンチョウ飛来数の推移と積雪量

● 給餌時間に集中する飛来傾向

サンクチュアリでは現在、午前9時と午後2時の1日2回給餌を行っています。1日の飛来数の動きは、給餌時間の前後に飛来が集中する傾向が強くなりました（図2）。また、以前のタンチョウは年が明けた1月以降になると食欲が落ち着き、給餌後すぐには食べに来ませんでした。それが2割削減の2016年度の冬から、1月以降も給餌後すぐ

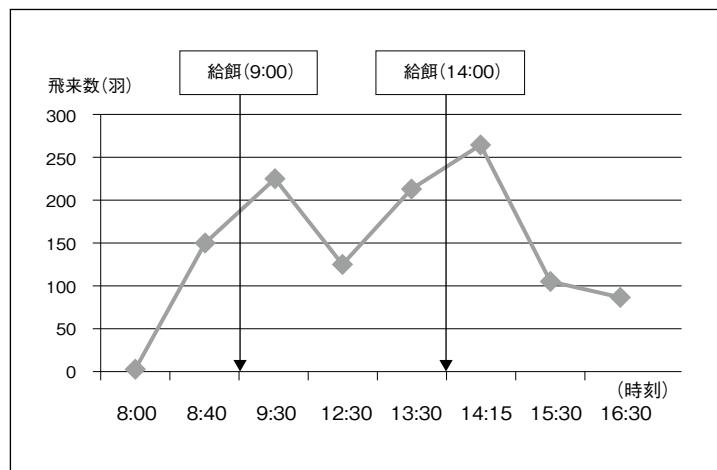


図2 サンクチュアリの飛来数変化 (2018年2月6日)

に先を争って食べるようになりました。近年は秋の台風が北海道まで上陸するようになり、強風で刈取り前のデントコーンが倒れてしまう畑が増えています。これにその年の積雪量が絡み、年ごとに給餌への依存度が大きく変わります。

削減4割となる今年度(2018年度)は、台風の影響はなく風倒コーンがほとんどない上に、刈取りは順調に進みました。鶴居村の秋の風物詩であった、畑にたくさんのタンチョウが集まる光景は、この秋は1週間と続きません。数もせいぜい数十羽程度です。これは、11月上旬の時点で畑

の落穂が例年よりかなり少ない状況を表しています。今冬は、雪の多寡にかかわらず、給餌量削減の影響は顕著に表れそうです。ただ、これまでは小雪や風倒コーンのために、削減の影響がよく分かりませんでした。この冬は今後の試金石になりそうです。

● 地域の視点での共生モデル策定へ

環境省は2017年度に、将来的には国による給餌は終了させる、という方針も示しました。

これを受け、鶴居村では主体的に、給餌を含むタンチョウ保護と酪農等の地域の産業との共生を目指しています。2018年7月には全村の様々な分野の関係者と一般公募の村民の20名からなる「鶴居村タンチョウと共生するむらづくり推進会議」が

発足し、年4回の会議で2年かけて独自の「鶴居モデル」という共生の形を策定しようと動き始めました。

もともと給餌は、地域の方が自主的に始めた活動でした。給餌が行政の事業になり、地域の手から離れて意識も距離ができていったように思います。野生動物保護や地域の自然環境保全は、そこで暮らす地域の方達が主体的に取り組まないと継続していくのは難しい、と考えています。私は上述した会議の委員の1人として、「鶴居モデル」がタンチョウ保護の新たな形となることを目指しています。

古文書から探るタンチョウの歴史

～石狩低地帯に帰ってきたタンチョウ～

北海道大学大学院文学研究科 久井 貴世

江戸時代の蝦夷地のタンチョウ

かつて北海道が蝦夷地と呼ばれていた時代、タンチョウは道内各地に広く生息していました。天明元年(1781年)に書かれた『松前志』には、「東部蝦夷地シコツ、大澤曠野此鳥ワキテ多シ。白鶴アリ、蒼鶴アリ、黒鶴アリ、丹頂殊ニ多シ」との記述があります。蝦夷地にはツルが非常に多く生息しており、特に多いと記される「丹頂」(タンチョウ)以外にも、現在では滅多に渡来しない「白鶴」(ソデグロヅル)、「蒼鶴」(マナヅル)、「黒鶴」(ナベヅル)も生息していたことがわかります。現在のタンチョウの主な生息地である道東地域では、江戸時代にもタンチョウの記録がみられます。例えば文化5年(1808年)には、根室の北東に「丹頂の鶴むれゐる所あり」(タンチョウが群れ集まるところがある)ことが記録されています。また、文化6年4月30日(新暦1809年6月12日)の記録では「シベツ川上ニ鶴あり。年々二三羽ツツ、体軀丹頂之由」とあり、標津川の上流部では毎年2～3羽ずつのタン

チョウがみられていたことがわかります。これはつがいや親子でしょうか。

道東地域に記録がある一方で、江戸時代には「イシカリといふ所のあたりに丹頂の鶴多し」という記述も確認できます。現在では、イシカリ(石狩)を含む道央地域で「丹頂の鶴多し」という風景を見ることはできませんが、江戸時代には石狩や勇払など石狩低地帯に多くのタンチョウが生息し、特にシコツは生息地としてよく知られた地域でした。先述した『松前志』でも「東部蝦夷地シコツ」の名前が挙がっています。シコツとは現在の千歳地域のことで、文化2年(1805年)、ツルが多く生息することに因んで「千歳」と改名されたほど、多数のツルが生息していたようです。安政4年(1857年)に千歳を訪れた玉蟲左太夫は、千歳ではツルの声を聞かない日はなく、川岸や沼辺に数羽ずつ立つツルの姿を見たことを記録しています。その様子から、「千歳ト名付ケタルモ至極尤ノコトナリ」(千歳と名づけるのも当然だ)と感想を述べているほどです。

なお、シコツとはアイヌ語のシ・コツ [shi-kot] = 大きな・沢に由来する地名ですが、箱館奉行所役人の山田嘉充は、その音が日本語の「死骨」に通じて縁起が良くないと考えました。そこで箱館奉行の羽太正養に改名を依頼したところ、羽太は、この辺りにはツルがたくさん居るので、縁起の良い「鶴は千年」に由来して「千とせ」ではどうかと提案し、シコツは千歳と呼ばれるようになりました。この改名の経緯は、羽太が千歳市釜加神社の弁財天御厨子に記しています。面白いのは、羽太自身はこの発案を「たはぶれ」(戯れ)と書いていることです。羽太にとっては軽い冗談のつもりだったのでしょうか。真偽は定かではありませんが、当時の千歳に多くのツルが生息していたことを示す重要な地名であることは間違いありません。

このように蝦夷地に多く生息したタンチョウは、人々にとって有用な資源でした。江戸時代の武家社会では、鳥類は贈答品として非常に重要な位置づけにあったからです。ハクチョウやガンなど、様々な鳥が將軍への献上や天皇への献納、將軍からの下賜などに利用されてきましたが、なかでもツルは、その筆頭として最も重要視されていたことがわかっています。そのため、蝦夷地を支配した松前藩や幕府にとっては、タンチョウをはじめとするツル類は重要な産物であり、アイヌも弓矢やわなでタンチョウを捕獲し、これを和人との交易や献上に利用しました。図1に描かれているのは、アイヌと松前藩との間で行われた献上儀礼の様子です。画面右側にはアイヌが持参した種々の土産が描かれていますが、アザラシなど海獣類の毛皮や、アワビ、サケ、チョウザメなどの水産物が地面に直接置かれているのに対して、2羽のタンチョウとその手前のオットセイは、いかにも恭しく朱塗りの台の上に置かれていることがわかります。この様子から、タンチョウが如何に重要な産物として認識されていたのかを窺い知ることができます。江戸時代のツルは食材としての利用が多く、蝦夷地の産物にも「塩鶴」(塩漬けのツル)がたびたび登場します。ただし当時の史料では、最も美味しいのはナベヅルで、次いでマナヅル、さらにソデグロヅルは下等であるとし、タンチョウは肉が硬く味も良くないので、食用にすることは少ないと記されています。タンチョウを全く食べなかったわけではないと思いますが、特に姿が美しいタンチョウは、食用よりもむしろ飼鳥として需要がありました。水戸黄門で知られる徳川光圀は、松前藩主から進上さ

れた蝦夷地のタンチョウを2羽飼っていましたし、室蘭のアイヌが捕獲したタンチョウは江戸城で飼われていたことがわかっています。

江戸時代のタンチョウ：蝦夷地以外での記録

なお、江戸時代にはタンチョウは蝦夷地以外にも生息していました。例えば弘前藩領の境村(青森県北津軽郡鶴田町境)では、元禄12年3月23日(新暦1699年4月22日)に捕獲した「丹頂鶴一羽」を塩漬けにして、江戸へ送ったという記録が残されています。あるいは、小倉藩領の曾根(福岡県北九州市小倉南区曾根)では、寛永5年1月22日(新暦1628年2月26日)に「たんちやう^{つる}鶴^{つる}壺^{つる}つ」が捕獲されています。現在ではツルとあまり関わりがなさそうな琉球(沖縄県)でも、乾隆25年(1760年)の秋に栗国島濱村(沖縄県島尻郡栗国村浜)に「丹頂」(タンチョウ)が飛来し、11月18日(新暦12月24日)に飛去したという記録があります。よく、「タンチョウは江戸時代には広い地域に生息していた」と言われますが、当時の史料からは、実際にタンチョウが広く全国に生息していた様子を確認することができます。

幕府や仙台藩の記録には、次のような記述もみられます。幕府では「こたび鷹にて丹頂の鶴とり得しかば、大内へ^{あわせ}駅進せらる」、仙台藩では「大鷹ヲ以テ、丹頂ノ鶴ヲ^{あわせ}獲タリ。希有ノ事ナリ」とあり、これらは鷹狩でタンチョウを捕獲したことを示す記録です。鷹狩は、江戸時代の支配者層が特権的に行う狩猟であり、鷹狩においてツルは最上級の獲物でした。主君の鷹狩を成功させるためには、獲物となるツルを安定的に確保することが不可欠であり、幕府や諸藩では専門の役人を置き、餌づけなども行いながら厳重にツルを管理していたことがわかっています。なお、実際の鷹狩の記録をみると、獲物とされたのはタンチョウよりも、むしろナベヅルかマナヅルが主であったようです。蝦夷地以外では、ナベヅルやマナヅルのほうが多く渡来していたためでしょう。さらに、タカ(ツルを獲るのは主にオオタカ)にとってツルは獲るのが難しい獲物であり、ツルの反撃でタカが死傷するという記録も多くみられます。そのため、ツルの中でも大型なタンチョウではなく、小柄なナベヅルが選ばれていたのではないかと考えています。



図1 『蝦夷国風図』より「藩主謁見之図」(函館市中央図書館所蔵)。

画面右側に、アイヌが持参した献上品のひとつとして2羽のタンチョウが描かれています。

明治時代の北海道のタンチョウ

話を北海道に戻します。明治に入ってから、石狩低地帯には多くのタンチョウが生息していました。明治14年(1881年)に明治天皇が北海道へ行幸された際には、天皇から「開拓使管内の丹頂の巢」についての質問があり、開拓使は千歳や美々、札幌丘珠村、石狩川沿いの湿地にタンチョウの生息地あるいは繁殖地があると回答しています。ほかにも、札幌では手稲村の入殖者がツルの群れや卵を見た、白石村で雛が捕獲されたなどの記録があります。明治のはじめ頃、タンチョウは千歳や札幌でも繁殖していたのです。また、明治18年(1885年)に阿寒産の「丹頂の鶴肉」が販売されたという記録があることから、石狩低地帯だけでなく釧路地方にもタンチョウが生息していたことがわかります。

しかし、明治24年(1891年)の北海道毎日新聞に「北海道に鶴の棲息したるは、今を去る五六年前迄にして、…遂に釧路地方は絶種に至り、残るは千歳夕張地方のみ」という記事がある通り、明治の中頃には、タンチョウの生息地は千歳と夕張地方だけといわれるほどに狭まってしまいました。そのため北海道庁は、明治23年(1890年)の訓令号外を以て「千歳郡馬追山麓より千歳川および夕張川畔に到る各沼地」を「鶴繁殖地」と定め、保護区とする措置をとります。当時ツルが最も多く生息するといわれたのは、石狩低地帯のオサツ沼とマオイ沼でした(図2)。オサツ沼は千歳市と長沼町の境にある長都沼、マオイ沼は平成26年(2014年)に完成した長沼町の舞鶴遊水地の場所にあたります。このあたりは巨大な沼地を有する広大な湿地帯で、まさに「鶴繁殖地」の中心地でした。ただし、この場所はツルの保護区であると同時に、周辺は全て入殖者への貸し下げ地でもありました。そのため入殖が進むにつれて1羽

のツルもみられなくなり、他の鳥類さえもいなくなったと記録されています。これは明治25年(1892年)の記録で、北海道庁が「鶴繁殖地」を定めてからわずか2年後のことでした。タンチョウの保護をめぐる北海道庁の対応は、すでに遅きに失したといえます。

その後は、明治27年(1894年)に広島村、現在の北広島市で捕獲されたタンチョウの幼鳥が明治天皇のもとへ献納され、皇居で飼育されたという記録があります。また、千歳に移住した入殖者は、捕獲したツルで缶詰を自製したり、脛骨でかんざしを作ったりしていたそうで、明治26～27年(1893～1894年)頃まではツルの姿が見られていたといえます。石狩低地帯のタンチョウは、明治20年代後半までは生き残っていたようです。浦臼では、明治35年(1902年)頃の話として、「畑仕事中に大きな鳥が5～6羽飛んできて、父からあれがツルだと教えられた」という古老の話が残されていますが、この記録以降は、北海道のタンチョウの情報はほとんどみられなくなります。

明治25年(1892年)の北海道毎日新聞は、ツルの保護について次のように記しています。

若し其筋に於て当初の目的を貫徹せんと欲せば、蕃殖区域地内は勿論、其四周付近に於て発砲する事を禁止する等の手段に出でざる限りは、鶴蕃殖の事の如きは、幾百年を経るも到底期するを得ざるべし。

約130年前、石狩低地帯でのタンチョウの保護は失敗し、繁殖については「幾百年」を経ても到底不可能だと考えられました。しかし近年、石狩低地帯ではタンチョウの飛来や定着が確認されています。むかわ町では繁殖にも成功しており、さらに今年は札幌市の丘珠や浦臼町でも目撃されました。旧マオイ沼にあたる長沼町の舞鶴遊水地でも、タンチョウの姿を見ることができます。舞鶴遊水地はまさにかつての「鶴繁殖地」であり、むかわ町や札幌市、浦臼町もまた、過去にタンチョウが記録された地域と一致します。近年石狩低地帯に出現するタンチョウは、新たな生息地に「進出してきた」のではなく、かつての生息地に「帰ってきた」のだといえます。

明治時代には、幾百年を経ても到底不可能だと考えられたタンチョウとの共生。歴史の教訓を礎に、幾百年を経て石狩低地帯に「帰ってきた」タンチョウと再び共生できる未来を築いていくことは、現代を生きる私たちが目指すべき道なのだと思います。かつてのように、北海道の各地でタンチョウが舞えるような未来を期待しています。

※史料上でタンチョウであることが明確な場合以外はツルと表記しました。これはタンチョウ以外の種を指す、あるいはタンチョウ以外の種が含まれている可能性もあります。



図2 昭和23年(1948年)の長沼町の様子。現在でも学校や橋の名称にツルの痕跡をみることができます。

鳥の卵の不思議について

NPO法人バードリサーチ 黒 沢 令 子

自然好きな人は野外で野生の動植物と出会うと心が躍ります。特に鳥好きの人は、珍しい鳥や絶滅危惧種で、皆の関心を惹くような鳥を見かけると、うれしさも格別になります。このように生きた鳥と向き合うバードウォッチングでは、野外での出会いや体験が大きな動機になり、「また、明日も出会えるかな？」と野外に出かけるのが楽しみになります。

一方、鳥の体から抜けた羽や、剥製にした標本、卵を愛でる趣味もあります。こちらは博物学的な興味で、特に鳥の卵の収集は18～19世紀にドイツとイギリスで興隆を極めました。

鳥が生み出す色

鳥の羽には、基本的には保温や断熱などの生命を維持する機能がありますが、一番外側にあつて外から見える部分には、隠蔽色、手の込んだ模様や美しい装飾が施される場合があります。これは、鳥たちが捕食者をあざむいたり、後者の場合は鳥社会の中で目立つなどの利点があるので、長い進化の過程で手に入れてきた戦術なのです。

鳥の羽は人間の目から見ても美しいので、装飾やアートにも利用されるほどです。そうした羽の色は、色素に基づく色と、構造によって色があるように見える構造色から成っています。単純な色の羽には主にメラニン（黒から茶色系）やカロチン（黄色から赤色系）、ポルフィリン（赤や緑色）などの化学色素が見られます。こうした色が組み合わせることで、多種多様な色合いの羽ができ上がります。一方、カラスの濡れ羽色やカササギの羽の青く輝く部分は構造色で、羽の中の複雑な構造によって反射された光線が人の目に色として見える現象です。実際の羽では、構造色の羽の内部にもメラニンのような色素が含まれていることも多いので、基礎は黒く、角度によっては虹色に色が変わるような複雑な色彩効果が表れることがあります。

一方、鳥の卵は色模様の美しさと共に、形の愛らしさや、イギリス人にとっては何と性的な魅力さえ認められてきました。かつてイギリスには、鳥の卵殻を集めていたコレクターやアーティストが沢山いました。当時はこの活動を「鳥卵学（オウオロジー）」と呼んでいました。また、鳥類の研究者はこうした博物学標本から、様々な知的情報を導き出そうと努力してきました。

ここでは、鳥の卵について興味深い点をかいつまんでお話しします。また、「おおまかに言えば」という前提付きの話で、生物の生き方には必ず例外があることはお断りしておきます。例外を含めて詳細を知りたい方は、『鳥の卵（2018 白揚社）』をご参照下さい。

卵殻の色や形

私たちが日常なじみの深い鶏卵の色は白か赤褐色ですが、様々な色がついた卵を生む鳥もいます。卵殻の色は主に、生物が体内に本来持っている二つの色素の組み合わせからなっています。一つは、人が肌をぶつけたときにできる青あざの色で、ビリベルジン（胆緑素）といいます。もう一つは赤血球と同じ鉄由来の赤い色素でプロトポルフィリンといいます。また、下地の上にさらに模様がつく場合もあります。一見、白く見える卵でも、ホンセイインコの卵は色素が入っていないのですが、ペンギンの数種の卵をよくよく調べると、両方の色素が入っていたそうです。そうすると、外見だけから白い卵とか色付き卵と判断するのは危険なのかもしれません。

鳥の卵に色や模様がついている理由については、これまでに数多くの研究者が頭を悩ませ、多くの仮説を立ててきました。まとめてみると、「捕食者に見つからないようにする（隠蔽効果）」、逆に「目立たせる（警戒効果）」、「自分の卵を区別する（個体識別）」に大別できます。警戒効果以外についてはいくつか証拠がある場合もありますが、まだ一つに絞りこむ結論は出ていません。

特に興味深いのは、ウミガラスという海鳥の卵です。ウミガラスの卵は下地が美しい青緑色で、その上に色々な模様がついています。しかも個体によって、色味や模様がたいそう違うのだそうです。そうすると、個体識別のためという可能性も考えられます。

また、ウミガラスの卵は形も変わっていて、片方がとても尖っています。鳥の卵は、フクロウ類のように真に球形に近いものから、ウミガラスのように極端に尖った形のもので、かなり多様です。そこで、ウミガラスはなぜこのように尖った卵を生むのか？という進化的な謎について、多くの研究者が沢山の実験をくり返してきました。これまで提唱された仮説は、尖っていた方が岩棚から転げ落ちにくい（転落防止）、卵を効率よく温めやすい（抱卵の効率）、ヒナが生まれる丸い側を汚れから守りやすい（衛生）など沢山あります。しかし、いまだにこれと絞り込める結論は出ていません。

最近、アメリカの研究グループが、鳥の卵の形を広範囲に調べてコンピューターモデルを使って解析したところ（ストッダードら 2017）、卵の形は親鳥の体の形や飛翔生活の在り方と関係が深いという結論を出しました。それによれば、卵の形は親鳥の体の制約によってある程度決まり、卵が外界に産み落とされてからの生存とは別だという話になります。

味や臭いについて

鳥の卵殻に見られる色模様の謎を味から説明しようとした人がいました。その人は、色模様の鮮やかな卵は「捕食者に対する警戒色」だと考えたので、鮮やかな卵と白い卵を食べ比べてみましたが、特定の傾向はありませんでした。また、飼い馴らしたマングースなどの哺乳類に与えてみたところ、青い卵はよく食べ、白い卵を食べないなどの好みが分かれたそうですが、その意義は不明でした。

北大西洋の岩礁海岸にすむ人たちは伝統的にウミガラスの卵を採って、夏のごちそうとして食べてきました。イギリスでは、減少が著しいので捕獲は禁止されたようです。しかし、アイスランドでは今でもこの卵を市場で売っているの、食べてみたという日本人のブログがありました。「チョコミント色の卵」（いい得て妙！）を茹でて剥いてみると、白身は半透明で、ちょうど水まんじゅうのように中の黄身が透けて見え、その黄身は「魚臭い」臭いがあったそうです。

黄身と白身の役割分担

ふだん鶏卵を食べるとき、黄身と白身のどちらがお好きでしょうか？黄身の方が濃厚で栄養もありそうなので、黄身の方が好きという人が多いでしょう。確かに、黄身にはタンパク質と共に脂質やビタミン類などの栄養があり、さらに目に良いとか、抗酸化作用で有名になったルテインという赤色系の色素など、生体に必要な物質が詰まっています。哺乳類では、母体から管を通じて赤ちゃんに栄養や酸素が送られますが、鳥の卵は母鳥の体とは離れてしまうので、卵殻の中でヒナ（正確には胚）が育つために必要な栄養素、酸素や水はすべて供給なくてはなりません。酸素や水蒸気などの気体は卵殻にある微細な穴を通して外界とやりとりすることができますが、それ以外については全部詰まった生命のカプセルともいえるでしょう。

では、白身はいったいどのような働きをしているのでしょうか？卵白の熱量はおよそ100gあたり47kcalと卵黄の1/8しかありません。また、卵白は90%近くが水分なので、水で膨れ上がったタンパク質の水風船のようなものです。とはいえ、卵白はヒナの発育に必要な水分を保つという大事な役割を担っています。そこで、ヒナが殻から出る頃にはすっかり水分を失ってしわくちゃな皮のようになってしまうそうです。いわば、折り畳み式水筒のようなものなのでしょう。また卵白には、セレンという免疫を向上させる物質や、リゾチームという細菌を溶かす物質なども含まれています。菌類を殺す力があるので、外から入り込む病原菌やカビから卵の中のヒナが侵されないように守っている生態的バリアの役割があるのです。

卵殻の歴史標本の意義

1950年代に、世界中でハヤブサのような猛禽類が減少したことがありました。そこで、ある研究者がコレクターが集めていた古い卵殻を調べてみたところ、第二次大戦後から急激に卵殻の厚みが薄くなっていることに気がつきました。卵殻が薄くなると、抱卵している母鳥の体重を支え切れず、ヒナが孵化する前に卵が壊れてしまうのです。

後になって、卵殻の厚みの減少はDDTという農薬が原因だったことがわかりました。DDTは殺虫効果の高い「優秀な」農薬として世界的に使用されましたが、生物濃縮（高次の捕食者の体内に高濃度で溜まってゆく）を起こす非常に危険な薬物であることがわかり、やがて禁止されました。日本でもDDTによる野鳥への被害はあったはずなのですが、サギなど少数の例外を除いてほとんど記録されていないのは残念なことです。

このように博物的標本やできごとの記録は、当初には特別な意義はなくても歴史的情報を得ることができる貴重な源泉です。そのためには、標本、観察記録や写真は、種別と共に、年月日、採集場所、採集者などを合わせて記録し、きちんと保管しておくことが大事です。特に、先代が亡くなって次の世代に引き渡されるようなとき、こうした記録が散逸することが世界中で起きています。それを防ぐには地域や国ごとに標本や観察記録の大事さを理解して、それを保管するシステムがあることが望ましいのです。

ただし、イギリスにおける鳥卵学は20世紀に入ると、狂乱的な採集活動によって個体群が脅かされる種が出てきたので、野鳥の卵の収集自体が禁止されました。現在では「鳥卵学」という学問分野は存在していません。何事も行きすぎはよくない戒めのようなのです。その代わりに、博物館などの公の機関が鳥卵や羽などの標本を保管して管理し、展示して広く一般の人や研究者に公開し、利用してもらう活動を行なうようになりました。

博物館の展示

野鳥の卵の実物を見る機会は希ですが、札幌市の北海道大学植物園にある博物館で剥製などに交じって鳥の卵の標本もいくつか展示してありました。前述したウミガラスや現生の鳥では最大のダチョウの卵などがありました。ウミガラスやハシブトガラスの卵は美しい青緑色なのですが、標本が古いせいか色が褪せてしまっていました。卵の色や形を比べたい方はカラーページが豊富な『世界「鳥の卵」図鑑』が参考になるかもしれません。

野外に出るのが億劫な冬の寒い日には、博物館に足を延ばして鳥の剥製や卵を見に行くのはいかがでしょうか？何か、新しい発見があるかもしれません。

参考文献

マイケル・ウォルター. 2006. 世界「鳥の卵」図鑑.

新樹社

ソーア・ハンソン. 2013. 羽ー進化が生み出した自然の奇跡. 白揚社

ティム・バークヘッド. 2018. 鳥の卵ー小さなカプセルに秘められた大きな謎. 白揚社

参考Webサイト

ウミガラス卵を食べてみたブログ

<https://blog.excite.co.jp/ICELANDia1/18025191/>

卵黄と卵白の栄養成分

<https://joyplot.com/life/2017/01/18/egg-protein/>

北大植物園 博物館

https://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/g_n_history.html



ティム・バークヘッド著
黒沢令子訳
2,700円+税



ソーア・ハンソン著
黒沢令子訳
2,600円+税

野鳥

情報コーナー

珍鳥コンビ！

天塩町更岸にてマナヅル・クロヅル発見！

オホーツク管内滝上町 小林 和史
札幌市中央区 的場 香奈

「ヒシクイがいる。マガンもいるね」2018年10月6日の夕方、私達は時折車を止めて双眼鏡を覗きながら留萌管内天塩町更岸のデントコーン畑にいる鳥達を観察していました。ヒシクイ達を観察し終え車を走らせていると、なんと車窓からデントコーン畑にツルが2羽いるのが見えました。天塩町ではツルは珍しいので「ツルがいる！」と思わず叫んで急いで車を止めました。1羽は赤い目元や羽の色などが明らかにタンチョウとは異なり、手元にあった野鳥図鑑で「マナヅル」とすぐに特定できました。もう1羽は、赤い頭頂部がちらっと見え、ぱっと見では、汚れたタンチョウのようにも見えましたが、どうも違います。こちらも野鳥図鑑やスマホの画像検索で調べたところ、「クロヅル」だと判明しました。2羽はとても仲良く一緒にゆったりと歩きながら、頭を上げたり下げたりして餌を探して食べていました。私達はこの珍鳥コンビを双眼鏡で夢中になって観察しました。普段、望遠カメラを持ち歩いていることが多い私達ですが、この時は所持しておらず、非常に悔しい思いをしました。仕方がないので、双眼鏡越しにスマホで何とか撮影しました。北海道では非常に珍しいツル（しかも同時に2種！）を見つけたこと、一応写真も撮れたことに興奮し、嬉しくなって私達はハイタッチしました。40分ほど

観察したところ、周りにいたヒシクイ達と共に2羽は仲良く飛び去って行きました。夕焼け空の中、利尻富士をバックに飛んでいく2羽を見てとても感動しました。

次の日、前日いた場所のすぐ近くの牧草地に2羽ともいるのを発見しました。やはり2羽仲良く一緒に行動していました。マナヅルとクロヅル、北海道ではどちらも迷鳥で珍しいのに、どこで出会い、なぜ別種なのにこんなにも仲良くしているのか。色々と不思議ですが、微笑ましい2羽の姿をみてとても愛おしい気持ちになりました。藤井聡太棋士の言葉をお借りすると、この2羽に出会えたことはまさに「僥倖」でした。この出会いに感謝でいっぱいです。



マナヅル（左）クロヅル（右） 2018.10.7

撮影：的場 香奈

野幌森林公園瑞穂の池に アカガシラサギが長期滞在

江別市 富川 徹

今年2018年6月上旬から9月上旬にかけて、江別市の野幌森林公園（以下「野幌」という）の瑞穂の池でアカガシラサギ1羽を継続観察したので報告します。

アカガシラサギを最初に確認したのは、野幌へ自然観察によく訪れる女性のOさん（札幌市厚別区）で6月9日に確認したことから始まります。それから、筆者ほか当北海道野鳥愛護会および野幌森林公園を守る会会員らによって、可能な限り本種の観察と同時に写真撮影などが続けられました。この間7月と8月の観察では確認できない日もありましたが、同個体が定着している可能性を信じつつ継続観察に努めました。その結果、9月2日が終認日となったことで観察活動を終了しました。

アカガシラサギがこれまで道内で確認された記録を本誌の過去号、藤巻（2012）、宮本（2016）、北海道新聞記事などから抽出してみました。記録は少なくとも29件以上におよび、確認地域は道南（函館(2)、厚沢部）、道央（余市、札幌、江別）、道北（天売島(6)、天塩、利尻島(4)、礼文島(6)）、道東（浦幌、浦河、網走、羅臼、標津(2)）と、ほぼ全道にわたっていましたが、日本海側でやや多い傾向がうかがえました（図1）。また、確認時期は、ほとんどが5～6月でした（図2）。この道内記録では確認羽数と滞在日数については不明が多く、滞在日数ということではほとんどが1日で、複数日になるのは3～5日が2,3例あるくらいです。今回のように3ヶ月近い長期にわたる滞在記録に加え、個体が夏羽から冬羽に換羽したという現象をとらえた事例は珍しいと考えられます。

前述の道内記録のうち、会誌でもこれまで4件の報告例がありますが、本記録は2005年の野幌大沢の池の記録に次ぐ2例目となります。今回の観察時期は鳥類の繁殖期でも、確認個体は常に1羽で特に営巣（繁殖）に至る情報は得られず、またケガをしているなどの様子もない雌雄不明の個体です。観察における主な行動としては、水生植物の繁茂する湿地部で身を隠すような休息と採餌が大半ですが、時折池の中を飛び回ったり樹林部に入ってしばらく見失うことも散見されました。

中国からベトナム、ビルマ、マレー半島、ボルネオ島を含む東南アジアに生息するというこの珍しいアカガシラサギですが、わが国では旅鳥や冬鳥で記録されるほか、繁殖や越冬の希少な記録もあるようです。来年以降もここ野幌に飛来するかも知れませんが、昨今において道内で分布北上をみせるダイサギなどの白サギとともに、まだよく分からない鳥として注意深く観察する必要があります。

最後に、観察活動にご協力いただいた皆さま、および関係者からの観察情報やデータの提供、ご教示をいただいたことに感謝いたします。

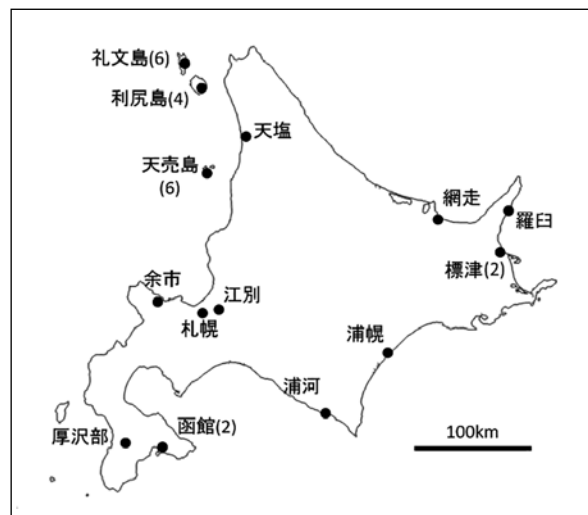


図1 アカガシラサギが道内でこれまで確認された地域（1956～2017） ※括弧内の数字は同一地域での記録回数、括弧なしの地域は1回のみ記録

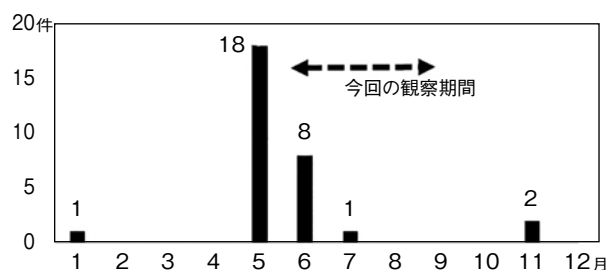


図2 これまでの月別確認件数と今回の観察期間



写真1 アカガシラサギ夏羽 2018. 6. 19 撮影：筆者



写真2 アカガシラサギ冬羽 2018. 9. 2 撮影：池端耕治さん

主な参考資料

- 藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録改訂4版. 極東鳥類研究会, 美唄
宮本誠一郎 2016. 礼文島の鳥類. 利尻研究35: 67-82
北海道新聞記事



福 移
2018. 6. 24
札幌市北区 道場 優

もう10年以上も、諸事情で訪れていなかった「福移の探鳥会」。福島の人々に、北海道の草原の鳥を見せたくてお誘いした。かつては長いこと担当幹事として、皆さんを案内して楽しさを共有した思い出の多い場所。まずは、参加された方の顔ぶれの変化に驚いた。そして、初めて参加した新人の会員の時の、緊張にドキドキし、期待にわくわくした新鮮な気持ちが甦ってきた。

集合場所も変わり、118年の歴史をささむ福移小・中学校の看板の下に集合する。担当幹事さんのスタート前の説明に、新鮮な印象をもった。“マキノセンニュウ”の声を紹介して、“今日はぜひこの鳥の声をみんなで聞いてください”と言う。すっかり役員も名ばかりになって、担当になってもマンネリの説明をしている自分に、担当者の個性が参加者を楽しませる工夫を産むものと、感じた次第。

堤防の草原に、カッコウやノビタキ、ホオアカやオオジュリンなどの夏鳥の姿を見つけ、爽やかな初夏を誘う鳥の声を聞いていたら、日ごろのストレスも解消した。隣にいた男性が、“私は、鳥の名も声も識別ができなけれど、この堤防から草原の風景を眺めながら、鳥を見るのが最高の楽しみ”と言った。探鳥会はそれでいいのだ！

“出る”常連の鳥もすっかり変わった。今はシマアオジの姿も声も全く聞こえないという。この探鳥会の楽しみだったウズラの独特の声ももう聞こえない。なぜ？人間本位の営みがもたらした地球規模の気候変動や環境の激変が、鳥たちを死に追いつけている。

「北海道野鳥愛護会」、「野鳥愛護」の意味は何？今、我々がなすべきことは何？を、強く問われていると思った。

【記録された鳥】 マガモ、キジバト、アオサギ、カッコウ、トビ、チュウヒ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン
以上26種

【参加者】 秋山洋子、安保信雄、今村三枝子、岩井幸子、岩井 茂、大表順子、栗林宏三、佐々木タカ、佐藤香織、品川睦生、島田芳郎・陽子、鈴木勝之、高橋きよ子、高橋貞夫、辻 雅司、道場 優、畑 正輔、原 美保、美頭佳範、福島 文、松木 修・ゆう子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、森本玲子、横山加奈子、吉見孝夫・紫乃、ほか2名
以上33名

【担当幹事】 辻 雅司、原 美保

野 幌 森 林 公 園

2018. 7. 8

【記録された鳥】 キジバト、ツツドリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、アオジ
以上19種

【参加者】 阿部 徹、安保信雄、今村三枝子、岩井 茂、加藤正樹、小西美美枝、小林京子、小林弘輝、媚山陽子、近藤章子、漆崎 修、謝 倩水、白澤昌彦、高島 均・朋美、田守真一・敦子、辻 雅司、辻田捷紀、道場 優、富川 徹、長野隆行、早坂泰夫、樋口孝城、平田修二、藤岡千鶴江、松原寛直、本杉政司・朋子、山本育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子
以上34名

【担当幹事】 道場 優、富川 徹

石 狩 川 河 口

2018. 8. 19

札幌市中央区 関 久恵

今回初めて探鳥会に夫婦で参加、入会もさせていただきました。数年前からいしかり調整池でシギ、チドリの観察に通い、管理棟のトイレ、簡易トイレを何度も利用させていただきました。また、愛護会の会員と思われる方が、会員でもない私達に鳥のことを教えてくれたり、望遠鏡を覗かせてくれたり、とても親切にして下さりました。いつかはきちんと入会してお礼を伝えたい思いもあり、今回の探鳥会の参加となりました。

さて、石狩川河口探鳥会、シギ、チドリの秋の渡りも始まりとても楽しみにしていました。前日からの天気予報は曇り。自宅を出るとすぐに雨が降りだしましたが、ハマナスの丘ヴィジターセンターは曇り。開始前にはアマツバメが数羽飛び、電線にカワラヒワがたくさんとまっています。リーダーさんの前日の下見ではクロハラアジサシやミユビシギ、数十羽のアカエリヒレアシシギが見られたと話され、期待は大きく膨らみ探鳥会が始まりました。

海岸線に出るとポツポツ雨が…。ウミネコ、オオセグロカモメの幼鳥を観察し歩を進めると雨がだんだん強くなります。オオセグロカモメが波間に揺れたり波打ち際で採餌してる中に、嘴、足の赤い、頭のあまり黒くないユリカモメが2羽います。大きなカモメやゴミの中をイソシギがチョロチョロしています。先頭のリーダーさん方が波間に揺れる1羽のアカエリヒレアシシギを発見。元気に泳いでます。皆でじっくり観察しました。冬羽に換羽中か幼鳥なのか、首回りは茶色ではなくからだ全体が白黒二色です。

個人的には数年ぶりのアカエリヒレアシシギ、じっくり見られて嬉しかったです。

石狩川河口を過ぎた頃には土砂降りの雨に。終盤は歩く

のに必死で鳥どころではなくなりましたが、しっかりホオアカ、ヒバリ、ショウドウツバメを見つけた方もいます。さすがです。12時前に無事ヴィジターセンターに帰還。観察された鳥は15種、悪天候でも楽しい充実した探鳥会でした。ありがとうございました。

【記録された鳥】カルガモ、ウミウ、アオサギ、イソシギ、アカエリヒレアシシギ、ユリカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、カワラヒワ、ホオアカ

以上15種

【参加者】安保信雄、池田美由紀、今村三枝子、小野寺まゆみ、媚山陽子、近藤章子、齋藤由美子・佑朱、品川睦生、関 純彦・久恵、高橋きよ子、高橋宣子、竹田芳範、立田節子、田辺英世、田村裕子、富岡尊廣、蓮井 肇、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平田修二、藤岡千鶴江、松原寛直・敏子、丸島道子、本杉政司・朋子、山室ゆかり、横山加奈子、吉田慶子

以上33名

【担当幹事】畑 正輔、横山加奈子

鵠 川 河 口
2018. 8. 26
札幌市白石区 富樫 由衣

私は現在、野鳥を勉強中の身であります。前々から気になっていた探鳥会に今回ようやく参加することができました。

鵠川河口ということで、渡り途中のシギ・チドリ類を狙っての探鳥地だったと思うのですが、私にとってシギ・チドリ類はあまりお目に掛かったことがなく、図鑑を眺めているだけだとどれも同じように見えてしまう類でもあり正直苦手意識がありました。それを少しでも克服するためには実物を見る他無いという意気込みでありました。

当日はよく晴れており、集合場所である『四季の館』も大変混雑しておりました。河口に向かう途中でまずは電線に止まったムクドリ数羽がお出迎え。そして川辺に到達した前列の方々が何やらざわざわ。人気者のカワセミも姿を現しました。間もなくイソシギも発見され、私も他の方の望遠鏡を覗かせていただき、はっきり姿を捉えました。また、茶色い猛禽が川のすぐ上を横切り、ほぼ同時にカモが慌てふためいて水面に入り込む様子に遭遇しました。同じくその姿を確認した方が、猛禽はオオタカの幼鳥だろうと仰っていました。その後も河口に向かうまでに草原性の夏鳥なども見られました。

いよいよ河口に着くと、カモメやウをじっくり観察。より岸辺近くの砂浜に足を踏み入れるとようやく2種目のシギ、ソリハシシギ数羽が探餌中か岸辺をちょこまかと歩いておりました。お初にお目に掛かりましたが、反った嘴、橙色の足をしっかり堪能致しました。

鳥合せでは、「こんな鳥もいたのか」と自分が確認できなかった種も教えていただけたことが探鳥会ならではの収

穫でした。

今回の探鳥会ではこの時期ならではのシギや換羽中の野鳥たちを見る事ができました。大人数での観察というのは初めてでしたが、和気あいあいと良い時間を過ごせました。観察会終了後は鵠川周辺、特に左岸側の観察スポットを案内までしていただき深くお礼申し上げます。解散後一人で周辺を巡っているとチュウシャクシギにも出会えました。魅力多き探鳥会、是非、また参加させて頂きたいと思っています。



探鳥会で観察されたソリハシシギ

撮影：品川睦夫さん

【記録された鳥】マガモ、カルガモ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、ソリハシシギ、イソシギ、ユリカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオタカ、カワセミ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ショウドウツバメ、コヨシキリ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、オオジュリン

以上25種

【参加者】岩井 茂、大表順子、小山内恵子、小野寺まゆみ、門村徳男、佐藤伸善、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、辻 雅司、富樫由衣、橋本雄介・珠美、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、本杉政司・朋子、山地みのり、鷲田善幸

以上21名

【担当幹事】門村徳男、島田芳郎

道東・オホーツク宿泊探鳥会

2018. 9. 1～ 2
札幌市清田区 安保 信雄

2018年7月に入会しました安保信雄と申します。たまたま自宅の庭の木にヒヨドリが来て、「ピーヨ、ピーヨ」とうるさく鳴くのでこっそり窓を開けてみると、私の髪の毛のようなボサボサの頭をしてしっかりこっちを見ているではないか・・・それからすっかりやみつきになり入会させていただきました。

9月1日～2日「道東・オホーツク」宿泊探鳥会に参加しました。参加者41名、満杯の一台のバスで札幌駅北口を

朝7時半に出発し、高速道路を通って一気に網走まで約350キロ、5時間半をかけて午後1時過ぎに到着。昼食会場の網走原生牧場観光センターでは鍋が掛けてあったので、トリ鍋かと思ったら海鮮鍋で、ダシにコクがありとてもおいしかった。昼食後、近くの濤沸湖畔で観察です。湖の中の小さな鳥や近くでは、カワアイサやアオサギそして、イソシギ、タカブシギなどの多くのシギ類が観られました。特に、トウネンの群れが私たちの上空を上下左右に飛行する‘とびっきりのショー’には感激しました。そして、湖の国道側端には、2羽のタンチョウも観ることができました。この後、原生花園を見てから宿泊先の網走観光ホテルに到着です。

2日目は、朝6時から宿泊ホテルから網走湖にかけての早朝探鳥です。ホテルを出てすぐの林の中に、アカゲラやヤマゲラを観ることが出来、ハシブトガラなどのさえずりも聞こえました。網走湖畔では対岸で、しじみ漁の船が漁をしている中、こちら側では、ハクセキレイが水面に向かって一生懸命ジャンピングして餌取りをしている様子が、なんと対照的でおもしろい情景でした。その後ホテルに帰って朝食。8時に能取湖に向けて出発です。サンゴ草は一時危機的状況とのことでしたが再生されて、時期は少し早かったですが赤くなりかけていました。ここではアオアシシギやオグロシギなどの他、チュウヒ、ハイタカ、オジロワシなどのタカ類を観ることができました。次のサロマ湖では、予定を変更してハマナス群生地などの原生植物が豊富なキムアネップ岬に向かい、大小・多くの種類のシギ類を観察できましたが、その中でもエリマキシギを観ることが出来たのには感激しました。

2日間とも素晴らしい天気にも恵まれ、多くのそしてめずらしい野鳥にも会うことが出来、満足の探鳥会でした。また、私のような超初心者にもスコープを覗かせて下さり、詳しく説明して下さいました会員の方々には感謝にたえません。これからもなるべく足手まといにならないように努力しますので、今後とも宜しくお願いします。

【記録された鳥】

(9.1) 濤沸湖周辺、小清水原生花園



2018. 9. 2 能取湖卯原内 サンゴ草群生地にて

ヒシクイ、カワアイサ、キジバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、タンチョウ、オグロシギ、オオソリハシシギ、アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、トウネン、ユリカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、チゴハヤブサ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハクセキレイ、カワラヒワ
以上27種

(9.2) ホテル(網走湖畔)周辺、能取湖卯原内サンゴ草群生地周辺、サロマ湖キムアネップサンゴ草群生地
ヒシクイ、マガモ、コガモ、キジバト、アオバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、オグロシギ、ホウロクシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、ヒバリシギ、エリマキシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ハイタカ、ノスリ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ムクドリ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、オオジュリン、カワラバト
以上43種

【参加者】

安保信雄、池田みちえ、石橋和子、今村三枝子、大表順子、岡部良雄・三冬、小野寺まゆみ、栗林宏三、近藤章子、佐々木 裕、志田博明、漆崎 修、品川睦生、高橋きよ子、高橋宣子、立田節子、田中志司子、辻 雅司、富川 徹、中島房子、中村 隆、温井日出夫・潤子、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、樋口孝城、菱谷紀久子、松原寛直・敏子、道川富美子、村田睦子、本杉政司・朋子、山室ゆかり、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子
以上41名

【担当幹事】栗林宏三、佐々木裕、畑 正輔、早坂泰夫、横山加奈子

い し か り 調 整 池

2018. 9. 9

※ 北海道胆振東部地震の影響により中止しました。

野 幌 森 林 公 園

2018. 9. 16

※ 台風21号(倒木多数発生)で園内通行止めとなったため中止しました。

宮 島 沼

2018. 9. 30

恵庭市 近藤 章子

「そんな考え方だったら、ずっと会に入れないでしょう。」とある方に言われた。私が「鳥の種類も雌雄の区別も鳴き声もわからない。もっと勉強してわかるようになったら」

てからでないと会員にはなれないでしょうね。」と言ったことに対してだ。「入会して皆から色々と教えてもらいながら鳥について知識を増やしていけばいいじゃない」という優しい言葉が入会を決意する後押しとなった。また、宿泊探鳥会に参加するためには会員になることが条件であることも大きな要因だ。いつもと違う場所で観察すると、今まで見たことのない鳥を見ることができる。見たい、知りたい、鳴き声を聞きたい、探鳥会に参加したいという気持ちが高まり、6月に入会した。

10年前友人の誘いで宮島沼へマガンの増立ちを見に行ることがきっかけで、鳥に興味を持つようになった。千歳川、長都沼、支笏湖、ウトナイ湖、苫小牧演習林等で、野鳥の観察を始めた。行くと共に初めて出会う鳥に心奪われた。野鳥の可愛らしいしぐさ、神々しい飛び方、心和む鳴き声、美しい羽根の後ろ姿をカメラやビデオに収め、一人悦に入っていた。職場の仲間からは「鳥を見るためだけにわざわざそんなところまで行って……」(……には「もの好き」という言葉が入るのかな?)と言われた。

ウトナイ湖ヴィジターセンターに置いたあったパンフレットを見て、観察フィールドが近くにあることを知り、鶴川干潟、いしかり調整池、石狩浜、モエレ沼などへ出かけて行った。色々な団体が探鳥会を開き、数百円の会費で参加できることを知った。愛護会は無料だった。(これも入会を決める動機の一つであることは間違いない)

愛護会の探鳥会に初めて参加したのは、昨年9月10日のいしかり調整池だった。多くの参加者がいて、鳥を見つてスコープで確認しながら、池の周りを1周した。遠くにいるシギやトウネン、サギ類をスコープで見ながら種類を確認していった。最後の鳥合わせの時は、初めて聞く言葉だったので、「こんな言葉は広辞苑にのっているのかな」と思った。姿が見えなくても鳴き声を聞いたらチェックをつけると聞き、「へえ～、鳴き声だけでもカウントするの?」と驚いた。

4月に入ってから探鳥会があるときは都合をつけて参加するようにした。回を重ねるごとに鳥との出会いが増えた。野幌原始林では、フクロウの親子に会えてラッキーだった。また、アオバトを初めて見たとき、その美しさに感動した。実はアオバトの鳴き声がある人から「あれは鹿の鳴き声だ」と教えられていたので、鳴き声と姿が一致したときには、天地が入れ替わるほど驚いた。教えてくれた人はまだ、鹿の声だと思っているのでしょうか(笑)。鳴き声がわかれば、どの木、どの枝に鳥がいるか探すことができるので、鳥と会う確率が高くなる。この鳴き声を聞き分けるといことが、私にはとても難しく、どの方向から聞こえてくるか、何という鳥の鳴き声か等、すぐわかるベテランの会員さんへのリスペクトは測り知れない。また、雌雄の区別、幼鳥と成鳥との違い、夏鳥と冬鳥の差などわからないことばかりだ。

今回は、私にとって愛護会3回目の宮島沼の探鳥会だった。朝飛び立ったマガンがどんどん戻ってきて沼に降り立

つ。マガンばかりの群れの中から、シジュウカラガンを探す。去年より探すのが早くなったと自己満足。頬の一部が白いトモエガモ、羽飾りがかったいいカンムリカイツブリ、白っぽい色のマガン。この日も全員で27種類の野鳥を確認した。私は7～8種類かな。飛んでいる鳥の姿を見て、あれはハヤブサ、これはチュウヒと的確な判断にはいつも頭が下がる。大きさ、飛び方、羽の形などをきちんと頭に入れておかないと瞬時の判断は難しい。見る機会を多くして早く判別ができるようにしたい。さらに、カンムリカイツブリは遠くて写真に写すことができなかったので、いつか機会があれば自分のアルバムに自分の写した写真を収めたい。終了間近に二羽の白い個体が沼に降り立った。サギじゃない。ハクチョウだ。スコープで確認するとオオハクチョウでなくコハクチョウだとわかった。違いは嘴にある。これも今回の収穫にしておく。チュウサギとダイサギの違いも嘴だ。周りの方々に支えられ、教えてもらい、楽しみながらこれからも野鳥観察を続けたい。

愛護会の役員、会員の皆さんは親切で知識が豊富だ。スコープで捉えた鳥を「どうぞご覧になってください」と皆さんに見せてくれる優しさ、三脚が高いとすぐ下してくれる心配り、類似種の判別方法を詳しく説明してくれる豊富な知識。愛護会の会員になれてよかったと思う。次回は、“my踏み台”を持参したい。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、コハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、アオサギ、ダイサギ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、モズ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ムクドリ、ハクセキレイ、アオジ

以上27種

【参加者】阿部勝利、阿部真美、今村三枝子、臼田 正、大表順子、北山政人、栗林宏三、近藤章子、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、謝 倩永、鈴木幸弥、高橋良直、田中 陽・雅子、辻 雅司、富川 徹、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、本杉政司・朋子、山室ゆかり、横山加奈子、吉田慶子

以上27名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野幌森林公園

2018. 10. 7

※ 荒天により中止しました。

野幌森林公園

2018. 11. 4

【記録された鳥】マガモ、コガモ、キンクロハジロ、トビ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガ

ラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ 以上20種

【参加者】阿部美子、石井正訓、今村三枝子、大表順子、大垣 創、小西美美枝、近藤章子、佐賀テエ子、笹森繁明、佐武明菜、品川睦生、島田芳郎・陽子、謝 倩氷、鈴木勝之、竹内 強、田守真一・敦子、辻 雅司、長野隆行、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、辺見敦子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山本康裕、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上32名

【担当幹事】竹内 強、早坂泰夫

ウ ト ナ イ 湖

2018. 11. 11

苫小牧市 大垣 創

今年度に入りまして探鳥会への参加は4回目となります。今回はウトナイ湖への参加となりました。苫小牧市在住とあって普段から行く機会がありますが、どうしても単独でのバードウォッチングが当たり前となっているので、判別のつかない鳥を目撃した際は、名前もわからないまま諦めていました。そのようなことが多々ありましたので、今回は探鳥会への参加を決めました。

さて、本題となりますが、11月となるとウトナイ湖もすっかり渡り鳥の数が多くなり、夜明けや日中問わず鳴き声が響き渡っています。また、自宅の真上を渡来しているので、普段の生活の中で木々などの植物を眺める以外でも、渡り鳥の集団のおかげで、季節の変わり目がはっきりとわかりやすいです。

しかし、渡り鳥（特にカモ類やガン類）の名前や特徴は、簡単に頭の中には浮かびません。普段のバードウォッチングでは、水鳥よりも山野の野鳥を中心に観察しているので、そろそろ名前や特徴を覚えたいと思いました。

ウトナイ湖一面に双眼鏡を向けて、ダイサギ、ハクチョウ3種、カモ類多数、ガン類多数と、今日は多くの水鳥が湖面で過ごしていました。更に、ゲスト(?)として、オオワシやオジロワシ、その他タカ類も顔を覗かせていました。水鳥たちもいくら集団で過ごしていても、自分よりも身体の高い鳥が来れば、驚くのでしょう…。湖面から上空へ集団で逃げていきました。

普段観ている光景とは違い、たまには面白い…。オオワシやオジロワシは何を標的に狙っていたのか…。これが自然に生きる生き物たちの生態バランス（人で例えるなら、社会の序列関係のようなもの）を楽しめました。鳥の名前に関しては、終了時に照合したチェックリストを参考に、自宅でくつろぎ過ごしながら、鳥類図鑑を眺めて覚えようとしています…。

余談になりますが、苫小牧市から札幌圏とバードウォッチングを普段は楽しんでいます。そろそろ今度は道南方面（主として出身地である伊達市の長流川周辺、室蘭市の測量山が最近気になっているポイントです）へのバードウ

ォッチングにも出かけようかなと思っているこの頃です。

今後とも機会がある際は、積極的に探鳥会に参加したいと思っています。本日はありがとうございました。

【記録された鳥】マガン、コブハクチョウ、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、カワウ、ダイサギ、シロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ 以上35種

【参加者】今村三枝子、岩井 茂、大表順子、大垣 創、北山政人、後藤義民、媚山陽子、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、辻 雅司、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、藤岡千鶴江、本杉政司・朋子、吉田慶子、鷺田善幸 以上20名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

【編集部からの訂正とお詫び】

前号(193号)の「外来鳥の現状と対策事例」の記事中、北海道に狩猟鳥として導入されたコウライキジが1984年から禁猟となっている旨の記載があります(3頁右段)。

その後、禁猟対象鳥類の見直しにより、現在は、禁猟対象外となりましたので、訂正してお詫びします。



【小樽港】

2019年1月20日(日)

札幌から貸し切りバスを利用して行きます。日和山灯台付近、祝津漁港、高島漁港、フェリーターミナルを回り、海ガモ類、カモメ

類、アビ類、ウミガラス類などを観察します。

集合場所・時間：札幌駅北口(中央)「鐘の広場」8:00

小樽駅からの参加も可能です。

(小樽駅前からの乗車9:20頃)

帰着時間：16:00頃 (小樽駅前での降車14:40頃)

定 員：45名

参 加 費：2,000円(当日徴収)

申 込 先：畑 幹事

1月5日(土)から8日(火)の毎日9:00~20:00まで

電話・E-mailにて受け付けます。

(乗降場所を指定してください。E-mailの場合、電話番号も明記願います。)

なお、定員になり次第締め切ります。

電話 011-894-0017

携帯電話 090-3117-4261

E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食をとります。
- ・往復とも小樽駅以外の途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2019年2月3日(日)

冬の野幌森林公園で雪を踏みしめながら、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。12時頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

昼食はふれあい交流館でとることができます。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：夕鉄バス 新札幌駅発（文京台南町行）

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅発（文京台循環線）

「文京台南町」下車 徒歩5分

【円山公園】2019年3月3日(日)

春の訪れを迎えた円山公園内で、キツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。

午前中で解散の予定です。（昼食は不要です）

集 合：円山公園管理事務所前 9:00

交 通：地下鉄東西線「円山公園」下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】2019年3月17日(日)

南で冬を過ごしたガン・カモ類が、この時期北の繁殖地に渡り始めます。渡り鳥の中継地であるウトナイ湖で多くのガン・カモ類、オオワシ、オジロワシなどを観察します。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとることができます。

集 合：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発（苫小牧行）

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆ 昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

☆ 問い合わせ先：北海道自然保護協会 ☎ 011-251-5465

10:00~16:00(土・日、祝祭日を除く)



鳥 民 だ よ り

◆新年講演会のご案内◆

・日 時 2019年1月12日(土) 13:30~16:30

・場 所 札幌エルプラザ 4F 大研修室
札幌市北区北8条西3丁目 (011-728-1222)

・講 師 百瀬 邦和氏
(タンチョウ保護研究グループ理事長)

・題 名 タンチョウ保護の行き先

・講演内容 タンチョウの北海道における分布は根釧から十勝に、そしてオホーツク海沿岸から道北に広がり、さらに近年は西北海道に向けて広がり始めています。そして、その個体数は現在2,000羽前後であると予想していますが、判断は難しいところです。冬に100羽以上が集まる5大給餌場での数は増えていない一方で、繁殖地に近い酪農場に分散して越冬しているツルが増えていきます。さらに、給餌量削減の試みが始まって以来、給餌場への飛来状況が変化していることも総数の把握を困難にさせています。道東ではタンチョウが餌場として依存している酪農場は減少を続けていることから、仮に、増加が頭打ちになっているとすれば、今後は生息数の減少をどこで食い止められるか、酪農場に代わる自然の採餌環境をどれだけ確保できるかが課題です。道央から道南、さらに津軽海峡以南へ分布を広げる作戦についても同時に検討していく必要があります。当然、ツルを受け入れる地域社会の理解は大前提です。こうしたタンチョウ保護活動の落としどころについては、ツルの生息地を抱えている各地の保護関係者から注目されています。

・野鳥写真上映会 (講演終了後、15:00頃から)

会員の皆様が撮影された写真を上映します。当日、写真をUSBメモリ等にコピーしてお越し下さい。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、「ユック」(札幌市中央区北1条西5丁目興銀ビル地下1F)で行います。会費は3,500円程度です。参加自由で、事前申し込みは不要です。

【新しく会員になられた方々】

平野 亨	(苫小牧市)
今堀 英明・弘美・颯紀	(紋別市)
村田 圭一	(札幌市中央区)
辰巳 研一・昌江	(札幌市北区)
大垣 創	(苫小牧市)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465

HPのアドレス <http://aigokai.org>